

シソ

シソ科：中国中南部、ヒマラヤ

栽培暦

月 旬	3			4			5			6			7			8			9			10			11		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主 な 作 業																											
	<p>○ 播種 (直播き)</p> <p>○ 播種 (直播き)</p> <p>○ 間芽引シソ</p> <p>○ 実シソ</p> <p>■ 収穫</p>																										

■栽培のポイント

1. 古い種子は使わない。
2. 播種時期をずらすと芽ジソ、大葉、穂ジソ、実ジソをそれぞれ続けて長く楽しむことができる。
3. 直播きでは、発芽直後雑草に負けるのでこまめに除草する。
4. 土が乾燥すると老化が早くなるので、株元を刈り取った草やわらで覆う。

■品種 葉の色によって赤シソ、青シソに分けられ、また、葉にしわのあるものはチリメンと呼ばれるが、程度の差が大きい。

青シソ……葉は濃緑色で欠刻が深く、葉面のちぢみが多い。独特の芳香があるが、系統によってはほとんど香りのないものもある。花色は白。
主に大葉として利用する。

赤シソ……葉は暗紫色で緑は深い鋸歯状、葉面にはちぢみがあり芳香がある。花色は赤紫色。
芽ジソ、穂ジソ等に利用する。

赤チリメン……葉は濃赤紫色、チリメン状で芳香が強い。花色は淡紅色。穂ジソ、うめぼし漬け、シソジュース等に利用する。

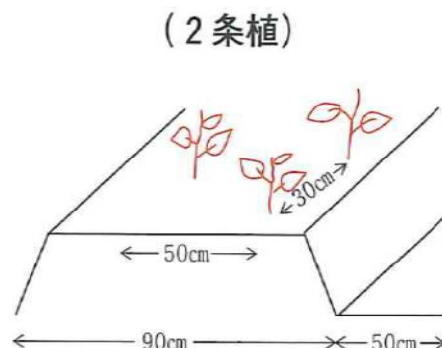
■播種 種子は一定期間の休眠をもつ。採種後乾燥させたり、高温にさらすと発芽率が著しく低下するので、冷蔵庫などで保存する。古くなった種子は使用しない。1aの本畑に対して、種子の必要量は、育苗する場合で10～20 ml、直播きで50～70 mlである。

施肥例

(a 当り)

うねつくり

肥料名	基肥	追肥	備考
完熟堆肥	400kg	—kg	定植 2 週間前に 全面散布し、耕起 しておく。 生育に応じ、10～20 日 おきにかん水を兼ねて 250～500 倍に薄めて 施す。
油かす	30	—	
石灰窒素	9	—	
苦土重焼燐	6	—	
塩化加里	2.5	—	
液肥 2 号	—	5	



- 育苗** 種子を流水に一昼夜つける。その後ざるにあけて水を切り、芽が少しキレたら播種床にばら播きする。好光性種子なので覆土を薄くするが、乾燥すると発芽が不揃いになるので寒冷しゃなどで覆い、乾燥に注意する。

発芽適温は 22～25℃である。本葉 1～2 枚目頃から 500 倍に薄めた液肥を 1 週おきを与える。

本葉 2 枚で 2×3 cm に仮植するか、間引きを 2～3 回行って株間を 2～3 cm にする。1 a 当りの必要苗数は約 1,000 本である。

- 定植** 育苗は約 40～50 日で、定植は本葉 4～5 枚時に行う。うね幅 120 cm 2 条植え (条間 45 cm)、株間は 1 本植えでは 15～20 cm、2 本植えでは 30～40 cm とする。

中耕・培土 倒伏防止のため 20～30 cm 頃にしっかり土寄せを行う。

- 施肥** 有機質肥料を主体に施す。肥料切れを起こすと香気が薄れたり、葉が小さくなり、品質・収量が低下するので、かん水と追肥を兼ねて 250～500 倍に薄めた液肥を 10～20 日おきにおきに施す。

- 病虫害防除** 主にアブラムシ、ヨトウムシの被害があるので早期に防除する。

肥料切れするとさび病が発生しやすい傾向がある。

- 収穫** 芽ジソは発芽直後、本葉が出る前のかいわれで収穫する。間引きを兼ねて行う場合は刃物で地際から切り取り、周囲を傷めないようにする。うめぼし漬け用の葉ジソは、草丈 50～60 cm で全刈りする。大葉は本葉 10 枚頃から、上部の展開葉を、葉柄をつけて手で摘む。穂ジソは 1 つの穂の花が 5～6 輪開花した時に穂の基部から摘み取る。実ジソは葉がほとんど終り、実の入り始めた頃に穂の基部から摘み取り収穫する。